

稲沢・瀬戸・知多半島を巡る椿旅

龍ヶ崎市 小泉不二男

東京駅の新幹線ホームに着いたのは約束の午前8時より30分ほど前だった。まだ箱田直紀会長の姿はなかった。ホームもガランとしている。

平成30年の暮れも押し詰まった12月24日。

寒さを避けて冬の日だまりで待つこと20分。発車時刻が迫り、やや心配になりかかったころ、「やーっ」と会長が手を挙げてこちらに歩いて来られた。手には沢山の荷物。

会長が、愛知県の稲沢と知多半島にサザンカの調査に行かれるとのことで、私がお供をする形になったのだった。

乗車した8時発の「のぞみ」は、新横浜を過ぎても空席が多い。ゆったりした気分で、海や山の景色に目をやりながらいつものようにツバキの話。

構想されているサザンカの本こと。長年のサザンカ研究の集大成となることだろう。この旅行も原稿完成に向けた調査の一つという。いろいろお聞きする。

1時間半あまりで名古屋着。名鉄に乗り換えて森上駅に10時30分。天気は上々。佐藤椿園を目指すも、駅前広場の交差する道をどちらに進むのか迷う。二人でこれまでの訪問の記憶をたどりたどり歩く。

5分ほど歩くと見覚えのある風景となる。やがて佐藤椿園が見えてくる。到着時間を告げていないにもかかわらず園主の佐藤晴美さんは通りに出ておられた。



佐藤さん宅にて
佐藤さんの藪椿を巡る旅の記録写真
をもとに歓談。



佐藤椿園内にて
(左) 箱田会長 (右) 佐藤晴美園主

椿の話が尽きない。

初代園主の佐藤稔氏のこと、中京の椿のこと、椿園経営のこと、次から次へと続く。

子息で3代目となる幹大さんが仕事の合間をぬって顔を見せる。一昨年春、園内での椿祭に訪れたとき以来の再会だ。

椿祭期間中、2千人を超えるお客様の駐車場の確保やブログでの椿情報の発信、効率のよい案内状の出し方などが話題になる。関東の育種家平井奏晨さんとの交流などもあるようだ。ツバキの蜂蜜販売も順調のようだ。椿展を運営するうえで参考になることが多い。

そのあと、椿庭園やビニールハウス圃場を見学させてもらう。挿し木接ぎ木のポットが増え、若い椿が育ちつつある。そのせいかハウス内に若さや勢いを感じる。これもエネルギーな3代目の就業による好影響だろうか。



ハウスの圃場の一つ
挿し木苗接ぎ木苗が増えている。



初音（園内にて）
秋咲き。「はつね」の響きもいい。

残念ながら、会長の調査目的のサザンカは、園内では見あたらないことが分かる。佐藤さんは畑に移したかもしれないので、これから案内したいとのこと。さらに瀬戸市の椿の友人の所にもお連れしたいとのことであった。

佐藤さんの車で出発する。

佐藤椿園のある祖父江町は今でこそ稲沢市の一部となったが、古くから苗木生産地としてその名が知られたところ。案内されると広々した平地と砂地のような土壌が特徴だった。

車窓から「カンツバキ」（勘次郎、獅子頭）の育成圃場を多く見た。カンツバキ畑が次々現れてくる。それ以外のサザンカやツバキの育成畑はない。

冬の風景を変えるほど垣根に植えられ、サザンカの代表にもなりつつあるカンツバキの主な生産地の一つが祖父江のようだ。佐藤さんによれば九州の苗木

生産地はカンツバキに力を入れていないという。茨城のホームセンターに並べられたカンツバキもどうやらここから出荷されてきた可能性がある。



寒椿の育成畑

祖父江は、カンツバキの一大生産地



花御堂（サザンカ）

白斑が入る

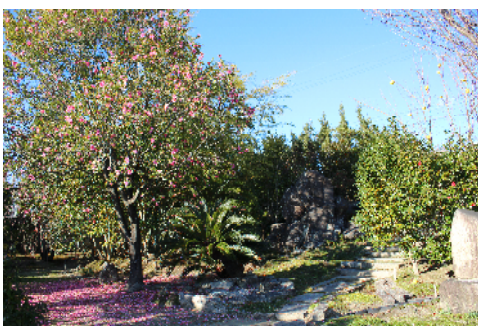
植木畑を一通り見て、そのまま瀬戸市に向かう。稲沢とは名古屋市を挟んで反対側になる。名神高速で東に向かう。途中サービスエリアで、サンドイッチを仕入れて休憩。1時間半で瀬戸市へ。

瀬戸市品野町にお住まいの瀬戸椿の会の田中博晶会長宅に着く。眺望がよく市街を見下ろす高台にある。既に連絡してあったようで、お出迎えを受ける。

田中邸ではまず椿園に驚かされる。傾斜地に石を配置した見事な椿庭園が広がる。佐藤椿園作庭という。見学者用の案内板も設置されている。

さらに品種は不明だが、カンツバキ系の高木が冬空を背に満開となっている。見事な椿盆栽も育てられている。

聞けば65歳で会社経営から退き、以来椿三昧の日々とのことであった。



田中邸の石組みの椿庭園

サザンカの高木が初冬の空に満開



丹精の椿盆栽を拝見

(右) 田中会長 奇遇にも若い頃に勤務した化学会社で箱田会長の弟さんと同僚。

会長の弟さんは、リタイア後は群馬の地で兄である会長が蒐集したサザンカ

を育成保存されている。化学会社のOB会などで田中さんもそのことを耳にしていたという。その「箱ちゃん」が会長の弟さんであることを知り、驚いたという。

瀬戸椿の会には会員の皆さんで長年にわたって整備してきた椿園があるとのこと。冬至を過ぎたばかりの早い日暮れを恐れてさっそく出発する。

急な訪問にもかかわらず会員のお一人が駆けつけ、車で30分ほどで白坂町の雲興寺着。足利氏、織田信長、尾張徳川家の庇護を受けた曹洞宗の古刹という。佐藤さんより参道に植えた椿の説明を受けながら一同で参詣。



雲興寺本堂

瀬戸赤津焼の瓦が冬日に映える。



雲興寺参道

佐藤さんが植えた椿が大きく茂る。

雲興寺に向かい合う広大な山林は、かつてゴルフ場建設計画が頓挫。そのままになっていたものを田中さんらが交渉して椿園として借り受けたのこと。以後、10年以上に亘り、瀬戸椿の会で竹林や病木の伐採を行い、椿を植えてきたという。

斜面を活用した椿園は、下から見上げて花が一望できる環境でもある。園路もある。水はけもいいのか、どの椿も葉に艶があり、樹勢がいい。斜面利用の椿園として関東には「こどもの国椿園」がある。それに匹敵する大規模な椿園といえようか。



市民の記念樹としての椿の植栽も受け付けている。案内板の申込み先が田中さんになっている。植樹料金1万円は、整備費に充てられる。椿の会だけでなく市民も加わった椿園造りが行われている。

この地は、愛知高原国定公園内に位置する。前を通る道は、環境省の東海自然歩道。雲興寺前の広い駐車場にはトイレも設置されている。そのせいか我々が見学している間も椿園周辺で散策する方に何度か遭遇した。見学者にとって椿園の立地条件はいい。

まだまだ見足りないながら迫る夕暮れにせき立てられ再び田中さん宅に戻る。

いくつかの椿絵がかけられた応接間に通される。部屋からは大きなガラス戸越しに椿が見える。1本は毛利白玉、もうひとつは獅子頭である。ともに枝ぶり木ぶり申し分ない。

毛利白玉は「日本の銘椿」(佐藤稔著:佐藤晴美さんの父君)によれば美濃国・八神城主の毛利源内掃忠侯が好みとしたと伝わる椿。秋咲きである。武人好みのきりりとした花容もいい。

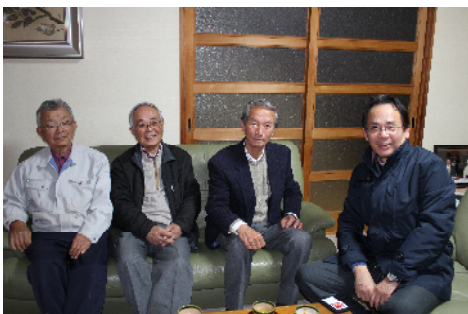
ガラス戸越しの名花銘木を前に椿を語らう。心に残るひとときであった。



毛利白玉



獅子頭 (サザンカ)



左より田中さん、箱田会長、佐藤さん。

このあと、佐藤さんに名古屋駅まで送っていただいた。宿は、名古屋駅近くのホテル via inn。

食事は駅ビル。人が多く混んでいると思ったらクリスマスだった。

2日目は、知多半島へのツバキ旅である。

協会の会誌25号（1986年）に知多半島の南知多町内海にお住まいの林彦三さんが「知多の銘椿を尋ねて」を寄稿されている。その中に18箇所の椿の紹介がある。そのうちの2つを調査しようというのだ。

名鉄名古屋駅9時11分の特急に乗り、終点の内海駅には10時7分に到着した。



名鉄内海駅



持宝院

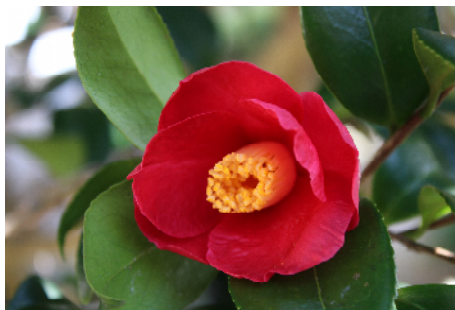
知多半島突端までの電車の便はない。内海駅から中学校脇を通って約10分。河和線河和駅かこの内海駅が終着。山の中腹にあるため参道が急な坂道。

林さんは先の紹介文の10番目に「持宝院の山寺椿」を取り上げ、「庫裡前にある山寺椿（ハルサザンカ）は近年有名になった。濃紅色の筒咲きで、10月から3月迄開花期が長く、周辺の藪椿が咲く前から見事に咲き誇っている」と述べている。

箱田会長は、30年以上前の報告ゆえに果たして残っているか気にされていたが、庫裡の前にそれとおぼしき木があった。花を見て、山寺椿と直感されたようだった。



庫裡前の山寺椿



山寺椿の花
濃紅色が特徴。

さらに続けて、「これはハルサザンカの「手向け山」の斑が入らないものだろう」とのことであった。

「手向け山」は近年、奈良東大寺で再発見され、話題になったハルサザンカである。斑入りの美花が会誌に載ったりした。

寺内の事務所で住職ご夫妻と面会する。来意を告げ、資料として林さんの報告のコピーを渡す。

お二人とも故人となった林さんのことは知っていて、山寺椿についてもおおよそのことは聞いていたようだ。林さんは、この内海の人だったのだ。

次は、性海寺のハルサザンカ星飛竜である。

同じ内海にある。地図を頼りに歩く。



知多半島を歩く。山の向こうは海。

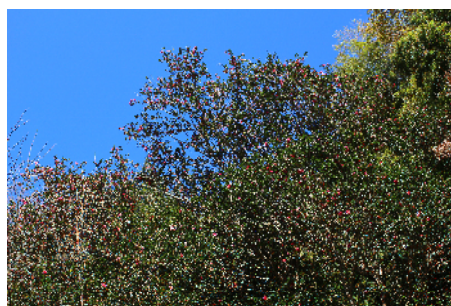


曹洞宗性海寺（しょうかいじ）参道

林氏によると性海寺は「秋のもみじの性海寺として昔から有名である。慶長5年に再建された本堂の裏山にあり、樹高15m程、幹周り1.35mの古木である。11月から3月末迄も咲き続ける」とある。そのほかにも椿が多いという。



慶長5年建立の性海寺本堂
右奥に星飛竜が見える。



本堂裏の星飛竜
見上げるばかりの高木。快晴の冬空に
紅白の花が調和。去りがたい美しさ。

知多半島には椿が多いとはよく聞くところではある。これも林彦三さんのような地元の方の地道な調査と発表があつてのことである。あらためて椿の先達に感謝の念を抱く。

性海寺の山を下り、再び知多半島の田間を歩く。

家もない道を歩くこと30分。内海駅に着く。遅いお昼を駅舎脇の喫茶店で食べる。町の中心ではないのか、人も少なくのんびりした田舎の駅だった。

このあと、名古屋に戻り、新幹線で東京に帰った。その間も話はまたまた椿。どこまでも尽きない。

品川で会長に別れ、家には8時頃着いた。

次は、林氏の報告された残りの椿を見に行きたいものだ。